



特集3

「とべ・TOBE」と砥部陶街道の誕生

平成16年1月末、焼き物の里に、矢野徹志の「アート」をテーマにした民間団体「アートの里づくり会議」の会員を母体とした「NPO法人 とべ・TOBE」が誕生した。広田村との合併が決定された頃であった。

昔、川登地区に陶石から粘土をつくるための水車が多数あった。ここを通る国道379号を砥部焼と原料の陶石産地「広田」とを結ぶ陶街道と名づけようと初代理事長矢野徹志は考えた。この提案をもとに、陶街道の発展を図るため「砥部陶街道五十三次」のポイントの決定や陶街道巡り帳、案内板等、一連の事業を町が実施した。

研修旅行で得た知恵と活力

発足当初は夢に燃え、モンゴル国立民族演奏会、中国山水画の旅、コンサート、観梅会、砥部町お宝探し、砥部陶街道巡り、砥部

焼き物の里の水車庄屋で町おこし

陶街道懇談会など多岐に渡る活動を試み、それなりに成果をあげたが失敗もした。専従スタッフの不在、資金力不足や地域との連携の問題などで、離れていく人たちが出てきた。

疲労、行き詰まりを克服させたのは、豊予海峡圏交流促進事業の研修旅行であった。先進県の大分県の由布院、大山町、小鹿田焼、別府、豊後高田、杵築、また宮崎県の西都、宮崎、綾町を訪ねた。特に、平成19年3月視察した宮崎県西都市の森の空想ミュージアム（高見乾司館長）の「祈りの丘



NPO法人 とべ・TOBE
理事長
日野 健三



水車庄屋「坪内家」

ギャラリー」や「九州民族仮面美術館」は印象的であった。壁を珪藻土で塗るなどボランティアの手で廃屋の元教会や古い民家を再生していた。

それに刺激され、同年4月より廃屋寸前の日野の生家を陶芸工房として使用するための改装を開始した。1年をかけて陶芸工房「談想舎」と「とべ・TOBE」事務局が完成した。地域の人々の集う拠点が出来た。

水車庄屋の保存と魅力アップ

水車庄屋「坪内家」の所有者である坪内侯乃さんが路線バス廃止により転居されたため、水車庄屋の管理を日野に委託され、それを「とべ・TOBE」





地域づくりに取り組む NPO法人

が支援をすることとなった。人々が集う場として、魅力アップのため、次の事業を実施した。東蔵を森本泰二郎版画館に、土間をとべ村厨房に、西蔵を鉄の作家西山毅の「さびさびくらふと」に改装し、平成23年3月には石窯を完成させた。石窯をつくるのに1年を要した。その原因は、資金が無いため自分たちの手で、砥部の土でレンガを造るところから始めたためであった。しかも、レンガ造り、石窯の設計、窯積み、全てが初体験であり、試行錯誤の連続であった。その工程は真夏の土採り・レンガ造り、秋のレンガ焼成、寒の窯積と大変過酷であった。しかし、松谷英明と岡本保孝の力で乗り切ることが出来た。また、砥部町の力により中村洞水制作の水琴窟が平成22年9月に設置された。



手づくりの石窯



石窯でピザ焼き



観月祭



素麺流し

「とべ・TOBE」の主な行事は、蛸祭り（川富神社）、観月祭（坪内家、餅つき（坪内家）と、毎月第1日曜日の川登市場への参加、協力であった。

本年は、6月のユキノシタ観賞昼食会、8月の水車庄屋の精霊たち展（公募展）、9月の水琴窟&名月の観賞祭、10月のそば花観賞そば会または収穫祭など坪内家を拠点とした新たな活動を計画している。さらに、ピザ焼きや素麺流しを行い石窯や厨房を活用し、地域の方々の知恵を借り農村食堂「とべ村」と石窯貸し出しなど運営方向を確立したい。また、森本泰二郎版画館、西山毅のてつさびクラフト、矢野徹志のミュゼ里山房、天野薫の薫工房、松谷英明の英峰窯、談想舎や窯元の連携を図り、アートの里のとべ芸術村の芽を育みたい。

川登地区の拠点水車庄屋「坪内家」



精霊たち展